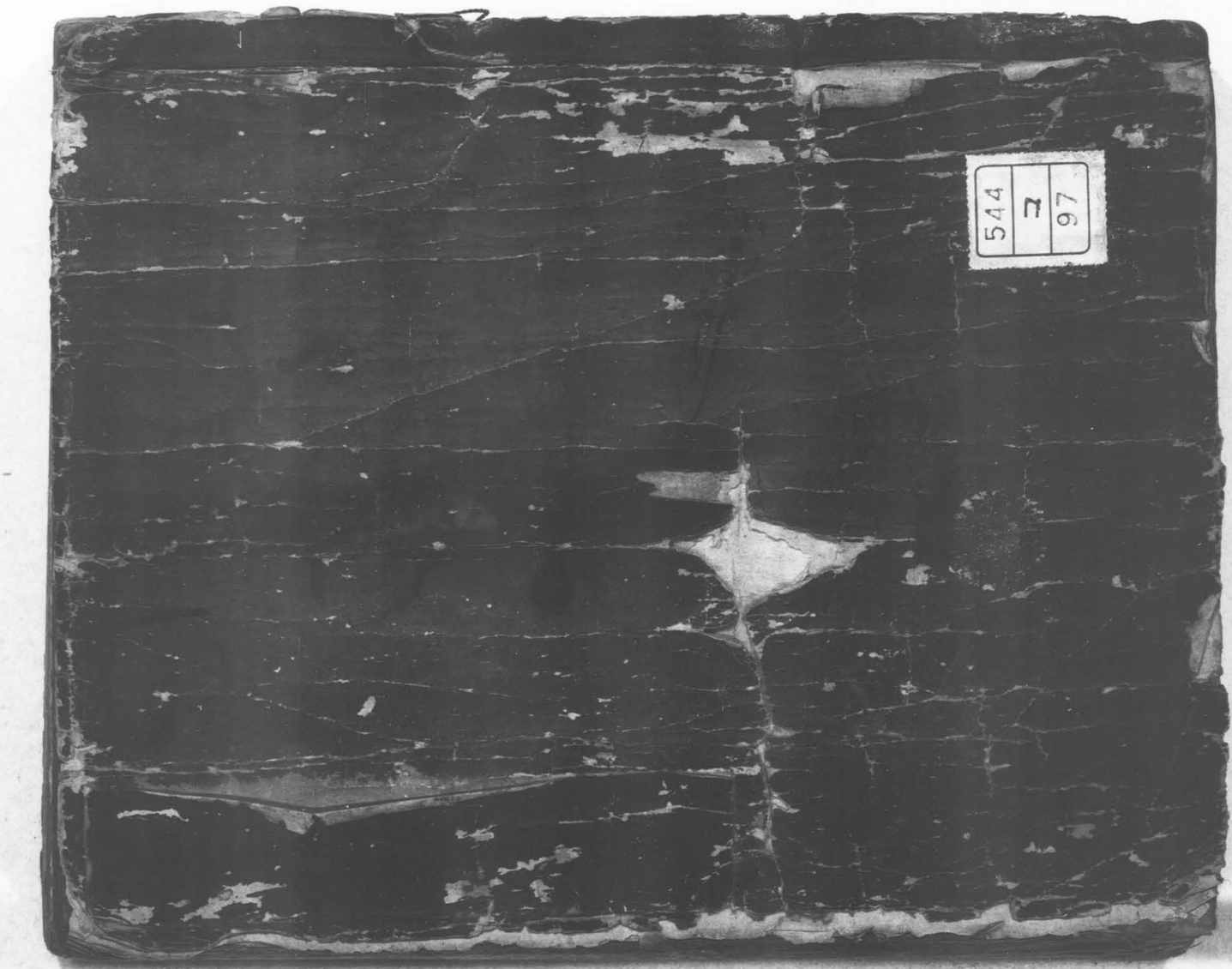
古今和哥集

正十番 箱二

544
コ
97


544
ㄷ
97
150 cm
10
SEKISUI JUSHI
20

24. 3. 19
昭和
182155

春のあさぼらけの
雲ゐのみもしもほえけるえんの
人ありけを哥にめやしくたくる
赤人のみかきもむとかくあひとまろ
うたにもとうをくるもあり
みれてあるそわわさらに行きけ
見てすいさくろあまき雪の
れおもきうにぬかくしゆく船を
赤人春の野をすこしれつみにこ
わかれうはしみちくれてうた
かり道ばにてかるきくわる
えすくれをるへくくれ行のせにきこえて
のちのふみをそうたあをろこれらさき哥

をあけそ万えう一つ
につくのと紙を哥へ
かひとりかちやこうあれ
うあそうひょうあるか時ちこの言うは
もてと歌あまり也とつきふるりにろう
へつと紙をこくとをきれるへうむんほからすま
こうとといおつさくらめそうきひとをやす
きやうなれていれすうへいるもちきせふうへ名きこ
いめるへはすおそち傍西通服て哥はさまはえされ
とをまとすくるうをうる紙れて

古今和歌集巻第一

春哥上

ゆくとしに春たちけるひよめる

在原元方

年の内に春きにけりひとゝせをこそやことしとやいはむ

春たちけるひよめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

二条のきさいの春のはつうた

雪の内に春はきにけりうぐひすの鳴くこゑにやとゞろかれぬる

梅さくにき井る高春さめのそゝぐをきゝてよめる

素性法師

雪の木ふりうもれる春なれば花なきさとも鶯ぞなく

春立ける日よめる

よみ人しらず

心さへうつろひにけりいたづらにわが身世にふるながめせしまに

二条のきさきの春のはつうた

あの雪の花と見ゆる
おくやまのいはまをわけていでくるは
この寄せ

雪の内に春はきにけりうぐひすの氷の下にこゑもらすな

梅さくにき井る高春さめのそゝぐをきゝてよめる

素性法師

雪の木ふりうもれる春なれば花なきさとも鶯ぞなく

春立ける日よめる

よみ人しらず

心さへうつろひにけりいたづらにわが身世にふるながめせしまに

二条のきさきの春のはつうた

あの雪の花と見ゆる
おくやまのいはまをわけていでくるは
この寄せ

三月三日なまくふかうして花をとあるあけ
ぼの
二日ばかりふりつる雪れのこりにおもかけそひつ
とよ
春の日のひとにあくる我ならん雪とあそひくら
雪れをるとよめる
霞まちこれもそるへき雪れをきにとそ花もちりけ
もるのもしめのよとよめる
春やとき花やとそれきてこひわたるふてをすてあるか
きのつらゆき
あらいらのとかた 言直
もるれはしめのうちこそ
ろきあとくいすのあらきりいあらてとそ思
寛平后宮きさいの宮歌合のうた
谷風のとくる氷のひまことに 源まさすみ 當純 近院女房
花うつろふ風れかなきものを
紀とものり
うくひすの谷よりいつるこえなくは
大江千里
在原棟梁 業平朝臣男

春立てゝ花もまだしき山ざとの雪げの水に鶯ぞなく

題しらず

読人しらず

野もせにうくひすなけばさわらびのもえいづる春になりにけるかな

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさと寒くうぐひすの鳴

春日野は今もさかりにをみなへしあきのくるべくなりにけるかな

梓弓はるたちしより春霞たなびきわびてうぐひすもなく

仁和のみかどみこたちにおはしましける時に若菜つみにつかはしける

ひさかたの雲のうへにてみる春はきみがためにぞ年もつむべき

きみをおきて春のゝそらはあらじかし我衣手に雪はふりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色をかはせる

かすがのはわかなつみにやしるしるく雪はふりつゝ人の行らむ

春たてば花とや雪のふるからむかつみるからに袖のぬるらむ

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色をかはせる

きさいの宮の歌合のとき

源むねゆきの朝臣

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

在原行平朝臣

ふるさとは花こそ春のかたみなれ

ときわかぬ松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

源むねゆきの朝臣

わらせこう衣春面もうこ
あとやきふいとよりかる春しろみして花のそう日に
西大寺のほとりの梅をよめる
僧正遍昭
浅緑糸もかけて白露を珠にもぬける春の柳
貫之
色てらとまさ作る春て物ともにわらへぬしを我ろわり
をちこちのそつきもてらめこ叶ふ春ろなくも愛鳥
かすれをきしてう(ほをけろくを思てろ
元河内躬恒

春くれいかりかろるの白雲ぬ道ひありふまやけてまし
凡鳥とろる
伊勢
はるうすん先つと人すてしりをい花ふきけとにすこそろ
よとへうす
野老らす
折つれい袖こうにう梅花ありとやこてにうくひすのふく
色ものかこうおれとたもの里ろ袖ぬれやとの梅そも
やとちく梅ふ花ふつおちきるく杉のにおやまされろ
梅花立ろ行あろしよ(とちもろかにそーみろ
むめ花をりてよろ
深草嘉禄 左大臣 左大将
東三条式后の御ちきこ
白河元年菊花や

鶯の笠とやいはん梅花折てうさしもおいてうるやど

もゝしらす　素性法師

よそのみにあふしもがなと思ふ梅花あやしく折てる袖

梅花をりてかざゝむ老らくの来むといふなるみちがてらゆき

きこりて誰よう見ん梅花雪とのみふこきまぜてよそにこそあらめ

くらぶ山にて梅花にほひ春風にやとそ人のこゝろやるらん

月夜に梅花をおりてとゝのつゞれるそらゆき　ゟつね

月夜にいろもかもしらす梅花かとうねてうぐひすの鳴

それよりもの花とをよそる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるゝ

もとにほうることにやそをけるくの家おしてく

やとりてをとてのらめふうれをれかの家のある

しかとさるよんやといひてゐるといひて待け

れいろふそらけるむそれをゆそよる

ゆらゆき

ひとふさかもちらすぬる時は花そ昔なにてほひける

水ゟゐてふむあの花さけるとそ

春ことにかろく河と花とを入てむらさめに袖やぬれなむ

年とへて花のかゝみとなる水をちらすとそよ〳〵

家にあてけるむめ花のちりけるを

ろくとあくとそれも梅花とまふろひあへん

寛平法皇きさいの宮の后宮の寄合のうた

ひあへと袖よりてそそかるゝ春かすみ

よゝ〳〵らす

素性法師

ちるとみてあるへきものを梅花うたてにほひのうつりかもする

よゝ〳〵らす

ちりぬともとたにのこせもみちの花こひしき時はかへりこむ

人の家にうへをけりけるさくらの花さきそめりけるを

とみてよめる

ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはしやせむ

よゝ〳〵らす

山たゝ人のもとにまかりてくらはしうへ侍りける桜の花のもとにて

みそめてと人のもとすらものらさくら

山さくら我身ふたつありもがなこゝにもこよひこゝにもねむ

清和御在位明年号貞観三年正月一日崩七十二

文徳御諱道康

うたゝねのきさきのみまつりの花うつしにまかりてよめる

をさ〳〵せしまつりとそよめる

年あれはさくらの花はおなしさかりなれとみる人ことにあはれまさりけり

なきさかのさくらもあれと花をこそ物思ふ春のしるしとはよめる

世にふればことのはしげきやましろにいほりむすべるしるしなりけり

在原業平朝臣

つねなるとおもひしものをさくら花ちるを見ましいつかはもとる

ふりはてぬいまはかきりとおもふ身にまたもあふさかのせきもがな

僧正遍昭

花さらは雪とやみまし白雲のかゝるかひなくたちまさりけり

素性法師

みわやまをいかにこたへてよめるか

いつもかもなく昔ふさくらそ年ゆきかへるしるしなりける

なれやさくら散よりのちの春のいろのうつろふ

ちりぬるをそなりつる春霞たなひくすらんさくらと

哥よめとおほせられしかはよめる

桜花さきにけらしあしひきの山もとかすみたちしみゆれは

凡そのこゝろはさくら花ちるをそうたがふとなん

花さらは雪とやみまし白雲のかゝるかひなくたちまさりけり

みわやまをいかにこたへてよめるか

いつもかもなく昔ふさくらそ年ゆきかへるしるしなりける

なれやさくら散よりのちの春のいろのうつろふ

ちりぬるをそなりつる春霞たなひくすらんさくらと

哥よめとおほせられしかはよめる

桜花さきにけらしあしひきの山もとかすみたちしみゆれは

寛平御時きさいの宮の歌合のとき

そえもの

みよしのの山べよさくらちくさ花雪ふるとうめやまさりけむ

やどひようめ月ありなどいひけるに

さくら花春くとそれる年にてつもるあれやそとも

さくら花さそふ山かぜ吹くまにそれ桜花ふりかくすらん

あさぶすまそれよこ雲ともみえけるかな

紀貫之

伊勢

猿人ら須

業平朝臣

けふこすはあすは雪とそふりおまし消ず有とも花とそみまや

よしのとす

らめれはこてれとそふるおき初とすう梅からにおそろ

折とらはおけはもあらん梅もいまやとうてちるまていかん

きのあつさ

さくらいろよ衣そよくうめそきも花ちりぬるのちなさに

ひくらの花のさけるもる成うふまてきらひけるろ

ようこてとんりなろ

ケつね

わやとの花見そらにるくそちるるそのちんこいる(き)

亭子院歌合の時よめる

伊勢

見る人もなき山里のさくら花外のちりなむのちぞさかまし

古今和歌集巻第二

春歌下

題しらず

よみ人しらず

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

待てといふにちらでしとまる物ならばなにをさくらに思ひまさまし

のこりなくちるぞめでたき桜花有て世の中はてのうければ

この里に旅ねしぬべし桜花ちりのまがひに家ぢわすれて

うつせみの世にもにたる花ざくらさくと見しまにかつちりにけり

僧正へんぜうによみておくりける

これたかのみこ

惟喬　文徳第一

母従五位上紀種子

名虎女

桜花ちらばちらへにちらすなよ（のきそふくもに）
雲林院そせんらへ花のちりけるそよろ

桜ちる木の下風は寒からで
空にしられぬ雪ぞふりける

花ちらす風のやどをもいとはなん
こそ見ぬ人もさそはれもして

さくら散ちりぬる木ぬしさへ有ないふもきろ人でも

あしれらけるこんのまうてきてつつふるるのちよ
よそでもふるよにてつつりるる

ひとろひつきみりやそうとはらら花ふるまちこそちらら鏡南

山ざくら花よりほかに知人もなくてそろる

春霞ふるすんちくとも花ちさとうてんろへきものを

心地ろこるいてやろ時ら風ふれ雪とぬ
——こるてのみ仏ろあいこれれるさくらもち
ろ成そそろろ

藤原ろうの朝臣

それこそそもれゆく花ならなくに
東宮雅院(ノ)
ちるとそそくろ
なもわびにちる花をおしからてやめそこれそれ
ちくらの花のちらはちる球そんくろ
すみの高世
けらゆき
とそらはさうすやはあんさくちるそくろ
ちくらおとそくちるおくろ
桜花そちるめそもゆくすんのつかれおくろ
さくらの花のちるそ球そくろ

きのとものを
名立へのひらまのそはさ春のみ(ノ)
春宮のとちくさおんそちるそくろ
春風は花のまそ球そきみ
ちくらおちるそをつやくろそん
雪とぬるにある球そくろ 九河内みつね
ひさにのかりてのつらに花へたちをいのち見
こそそんてわかいてちくろ花風は今ふてつら雪

けらゆき

一本　大伴黒主（トモノクロヌシ）

春ごとの花のあるじは誰もちて
　春（テイ）や院哥合哥
ちくら花ちりぬる風のなごりには水なき空（ソラ）に波ぞたちける
　なりの朝臣（アソン）
故郷（フルサト）と成にしならの都にも色はかはらず花さきにけり
　よしみねのむねさだ
花の色は霞にこめてたれかまた春の心を人にしるべき
　寛平法皇（クワンピヤウホフワウ）
春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事は命なりけり
　そせい法師

それの木と今はなりても春ごとに花のさかりを見るぞかなしき

　もりつな

春ごとの花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

　ふかやぶ

わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

　よしきん

わが宿の花見がてらに来る人はちりなむ後ぞつらからまし

　つらゆき

いざけふは春の山辺にまじりなむくれなば帰る道はまどはじ

　そせい

もろともにあはれと思へ山桜花より外に知る人もなし

いはまの野もにいとおほくちりみだれたる花ちるまで（ふる）

ようへいこう

春ことに花のちらくあるをあはれんまへのちるをけふ

花ゆへと世の人はすくもそてみやつかもきるまて

雪にあつそれるもみなちらんこのひとときをよそへまし

まつてこそてのやにくひなのきにちる花我折てはる哉

寛平きさいの宮の歌合のとき

藤原おきこも

ちく花はちるさかりにあるなしと誰うき春をうらみそめけん

春霞色わちくはよみてはるかすむ

震旦春の心をとをれと吹風を花のこすゑもうらむなるらん

ありはらのなりひらあそん

花これは心さしふかくおもほゆるいかてか春をうらみくらさん

みつね

うくひすのなくのみにこそ花の散吹風をも我やはうとき

吹風をおきてそうらみよ高き我やは先にゆくもある

典侍洽子朝臣（アニ）

ちる花のおくるるとまるあるをいかにうらまんや我高にあらまし

仁和の中将のみやす所に寄合せむとて
いひやりけるに　藤原後蔭（ふじわらのちかげ）
花ちるとやすらひきこそ聞えつれ
うつろふものをたれかとはまし
これさだをつかうまつりて
うせい
ちる花をしばしとてらすかげなくは
いつまの花のまがひてやまん
ふるきをもてなすといふ題よみ
ける
小野小町
花のいろはうつりにけりないたづらに
わが身よにふるながめせしまに
仁和の中将のみやす所に寄合せさせ給ひて
よるの
おもかげにみえつつもとな恋しきは
うせい
きのふこそ若菜つみしか春日野の
若紫のすりごろもかな
けらゆき
春の山ことに花の多かれば
ちる
樵る春の山をこえくれて道てごとの
ゆく花ちりぬ

寛平御時きさいの宮の寿合のとき

春の野にあさるきじのつまもこひ
山とりよりそふものにぞありける

やよひのつごもりの日雨のふりけるに藤の花をよめる

寛平御時きさいの宮の寿合のとき

吹風と谷のとりとをなさじやは
一つ木にさけるふぢなみ

春ごとにたちよりてをるべきものとしもなきを

僧正遍昭

ようにんてかぐらんかぶなの花をひとかざしせよとこいはるる

家に藤の花いけりけるをよめる

三つね

わやとにさけるふぢなみ花ならばたちよりてこそ折るべかりけれ

よしのつらき

いまもかもさきにほふらんそのかみの人の心の春雨にして

春雨にぬれつゝうつろふ藤の花ゆくへもしらぬ色をみるかな

ふぢの花をよめる

つらゆき

吉野河岸の山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり

題しらず　　よみ人しらず

かはつなくゐての山ふきちりにけり花のさかりにあはましものを
この哥はある人のいはくたちはなのきよともか哥也

春の哥とてよめる　　そせい

おもふとち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたひねしてしか

はるのとくすくるをよめる

梓弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひにうくひすのこゑのひさしうきこえさりけるを
よめる　　つらゆき

なきとむる花しなけれは鶯もはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに山河より花のなかれけるをよめる　　ふかやぶ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

はるをおしみてよめる　　もとかた

おしめともとまらなくに春霞帰る道にしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
おきかせ

こゑたえすなけやうくひすひとゝせにふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女ともを見て
よめる　　みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

夏哥

お月こけるきよ女ちう郎ちまて坊かのとをきこほゑ

ちつき万ふ花を地とれ乃ふ郎う付ける着乃ふ袖乃ふそに多

いれのふ五月きめてんあいもおよ郎ちけるろ川

けさきちよふまてこゆるう郎ちと花ちはるとやいのうら南

をとはこをこころする時て郎ちのうく坂をそちろ

きのともよて

をとはらけさこくれい郎ちふ今ろふふ今ろうまく

ろてきたけつちきけいおちまうめてさてまらめこい

ろせい

礒のう兄ゆう幾ふこて郎ちふ

礒しうす

なろふうの郎ちふあらは和やふ我ふろふさうせそ

なくよにるく坂きけそわうしけぬちさとちろこれ

郎ちるれく宝てまてくおれいちまれの思てれうら

思いちときものふ乃郎う唐紅のまりそくろく

ふくてるてくて兄くあ郎ちわう衣手れつとから南

おひきふ郎ちおうてくれうまはうとねとのきうく

いゆちうふふ乃ちおちとにる可

やまでら郭公まつてふ心を

寛平の時きさいの宮の歌合のうた　こくようのまち

五月雨に物おもひをれる郭公我ふくるまでそらにやくらき

わやくらきを過やまでらん郭公いつを我ゆへ待やとて

大江千里

やどちかく花橘もなかりせば何をかたれもとはんとすらん

きのつらゆき

夏の夜もまだふけぬるに郭公なくひとこゑのこゑのみしてあけぬるかな

紀友則

郭公こゑのするかたをながめやるまだしらつきのかげしかなしき

紀貫之

五月雨にぬれつつ郭公なくこゑをきくやうきねなるらん

凡河内躬恒

郭公こゑのするかたをながめやるまだしらつきのかげしかなしき

紀貫之

五月雨にぬれつつ郭公なくこゑをきくやうきねなるらん

凡河内躬恒

そきたるもとありなしいとある

ほとゝきすとゝきゝすらんこゑのみつねの

ふるさとによするほとゝきすとくなとこゑ

郭公松にふるくなれや我もちつゐにけり

そやそすとゐつゝ郭公松にきてとある

ありくやなみもこゑもきゝわたるほとゝきすこそみねの

うちはそうもとるきてきこゑ

ほとゝきす我とそるにかゝるなりけりとある

ほとゝきすなくやさつきのあやめ草

そらすくものとんてよるある

僧会遍昭

ほとゝきすなくにらふーまあやめくさとあさもく

月かくりつらけれ我あの月うにある

ほとゝきすなくやふ

夜ふかくほとゝきすなくらまはけめる城吉野つゝ月とも

とるまてらとこるくの花とこゐふをこをもらんれを

おりてこのこととてつゝ月ける

ちをとゝすてとうかふさきてよつゝとやめることの
みな月つこもりの日のよろ
夜と秋のゆきかふらしかつひらそかくすゝしき風やふくら
ケつね

古今和歌集巻第四
秋哥上
秋立日よめる
あきのとなにやこゝろのつくからにめにみえねとも風の
秋立日こゝろをのこゝろにそおとろかれぬる
しらつゆもこぼさしとおもふそらよ
河風のすゝしくもあるうらよ浪ともや秋のくるらん
凡河内
わかせこかきものすそをふきかへすゆふかせさむし
有原敏行朝臣

ゆふこゝろはやくとつまかいなそまちうとも秋風そやく

秋風の吹にし日より久方のあまのかはらにたゝぬ日はなし

ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかぢかくしてよ

天河もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

こひこひてあふ夜はこよひあまの河霧立わたりあけずもあらなん

寛平御時なぬかの夜殿上にさぶらふをのこども哥

たてまつれとおほせられける時人にかはりてよめる

とものり

あまの河あさせしら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

おなじ御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかぜ

契りけむ心ぞつらき織女の年にひとたびあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる　凡河内躬恒

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける

たなばたにかしつるいとのうちはへて年のをながくこひやわたらん

題しらず　そせい

こよひこん人にはあはじたなばたのひさしきほどにまちもこそすれ

なぬかの夜のあか月によめる

源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時はあまの河わたらぬさきに袖ぞひちぬる

やうかの日よめる　　みつね

きふそ今え年ぬるをそいかゝうとのこゝろをよめる

　　よしつら

このまより月のもるかとみえつるは秋のきりふかけり

おほえ山秋ふかうにわが身こそかなしきものゝ限なりけれ

　　元良親王　仁和第二皇子　元右中将　昌泰二年

わすらるゝ秋ともあらぬ物ことに秋そ人をもうらみはてぬる

ひとをのみこゝろ尓かけてあらわそよ日ゝあけかたの月

　　よしみねのみつね

ふるとなくわかの浦波たちかへりあとなき跡を思ふものかな

かむなりのつゐふんてあつまりて秋のよかりしを

よゝ守つゝよろこひけるに　　みつね

吹かへし風そよわたる白雲のうへまてにほふ秋の月

　　よしみねのさねかた

白雲のよそにのみこそ思ひしか秋ふかき夜の月をみるとは

さゝるとよく秋のきこゆるとて

　　こしきしまのみこ　大江千里

月見れはちゝにものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

をとこ有

久方の月の桂も秋はなほ
月とぞみるら
在原元方
秋の夜の月のひかりのあかければ
くらぶの山もこえぬべらなり
人のとにまれりけるをとこ
きてよめる
藤原としかた
きみこすとくるきりぎりす秋の夜の
長きおもひ我ねまちわび
もろこしに
よしめでたし
秋の夜のあかつきごとにきぬぎぬの
なみだをさそふ物とかは
とものり
秋の夜の千ゑもそなくむしの音も
よよをつくせる
在原元方
ひとりぬる人ふあらしのやまかぜに
是貞の親王の家合のうた

秋風ふきそめてよめる

そせの

題しらず

わがかどにいなおほせどりのなくなへに
いとどやまもるきりぎりすかな

書院にて人々歌よみけるに

長ともなく人待つほどのいねがてに
こほろぎとゝもにあかしつるかな

寛平御時后宮歌合のうた

秋風のふきにしあとのしら雲は
つばさをやすめかりのなりけり

ものへまかりける時に、ふぢはらのとしゆきがやどにてよめる、

ふるさとはしばしばきつゝわれもまた
こゝろをとめてみつるやどかな

寛平御時后宮歌合のうた

ケつね

山里は秋こそたゞにもれのみを
さまりてとふ人もなし

そせのまさみね

奥山に紅葉をわけしかぞ鹿の
こゑきく時ぞ秋はかなしき

秋ばかりかなしきものはなけれどもたとへていへばかなしかりけり

あさはきとしらつゆのそでてるくらしこれさくらのここの家の奇合よろろ

秋はきの花はきふけど高砂のをのへの小松今やなくらん

むすめあひてて秋のおもひでなのうりけるつゆくさもろろ　ケつね

秋はきの花ふさけ花火終ハ字れやすいわすれなうけを

ろろ人こて涙

あきはきよ染ひて人今らやひとをるの衣えにすち

きわるうて涙やむちつくん描やとのときのくの奇

はきう奇ふまふめえとい

ろろ人のそくこへ

なりて見はたらうめまき

萩う花ちうえとの奇

是貝の子こへ家の奇合ろろ

秋のこととくー夜奇ハまる

ろろ

名ふそてくおれる許九をこのて我れらにきとんつかろろか

偽広通昭うまたるらくこうわけ时たてこらにまを

文屋あさ源

偽広通昭

ミなへしを見てよめる

ふるのいまみち

をミなへしうしとみつゝそゆきすくるおとこ山にしたてりとおもへは

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへしをみなへし名をむつましみたひならなくに

題しらす

をのゝよしき

をミなへしおほかる野辺にやとりせはあやなくあたの名をやたちなむ

朱雀院の女郎花あはせによみてたてまつりける

左のおほいまうちきみ　本院贈太政大臣

女郎花秋の野風にうちなひき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣　三条右大臣

秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

みつね

つまこふるしかそなくなる女郎花をのかすむのゝ花としらすや

をミなへし吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

たゝみね

人のみることやくるしき女郎花秋きりにのみたちかくるらん

ひとをおもふもの女訓右我もやたうてんまし
もの〳〵下をけるよ人の家ゐをこそうらけ哉
うたゝ
ゐこそうつろへまんゆゑおれらやたいらそれい
寛平法皇時蔵人平ら定時かゝるそてこるよよ
ろろ
花あて生よいつらんをこそおほる野〳〵にねまりの哉
これさこのみこれ影の寄合よろろ
平さだこん
ろくしゆきの朝臣
るに人うきてぬきやりしせ花はまろ枝とに野〳〵を
ゐちはうま紙よそ人ふつりけろ
やをとろんうらんうしらはまわすれきやたいて
ゆちはまとよるろうせい
りもろおうこにつれ枝のふうめきかす藤はまも
判しに
平貞文
今ちいんて生ふ乃ら花すきふ何ゐ枝わいからけを
寛平法皇いのうち寄合のうく
ありそてもぬやみ

秋の野の草の花すきかつそてま袖く神と行

我のみやよそめもくるしくするゆゑけふこそそこ
に

ケ一ケ

今とてやとるひと草とうつろふら秋ふうろくの花ぞあら
ま

て草の花のひとくさ秋のてと思ふ人なとかろ

月草に衣はすともあさつゆにぬれてのちこそうつろひ
もせめ

仁和の御うた

吹覚せむそれまてふたりまて名はをしまし

鳥ふやとら鳴つるまてゆめ通昭うくの

ゆふやみちは秋のてと行ふ通昭を秋のてとおもふ

僧正遍昭

たてこめてあれて人こそ待にやとらるる秋のてらる

古今和歌集巻第五

秋哥下

文屋やすひて

雷ゐて雨うちなくなり行ゐの朝の原いまだ
秋なる月ぞあまたゆらるるくさかげそうそう秋ふかのうら
ちくやなる神るひこのもみち葉をたにうつろ秋を
自観の法師時綾綺殿乃もみちをもとめの木ありけるに
のうたにさせりけるなどみちをもとめ
ぬしにこととのうたにとのこと元のようけつつそよる
藤原のちをむ勝臣
かうことわきそこのとうろ西こうれへてそなれ
ぬ同じにあそうるみをは山々ケらを見そよ
つらゆき

秋風の吹く日のうらをそこみねのこすえつまよけり
これさだのみこの家の歌合にうる
そらゆきの朝臣
きのふこのそをてにうもん
壬生忠岑（みぶのただみね）
秋の夜の雨をいつもきるころもうもん
夜ぞ
秋ものうことにをけさこるふの
もらふのうをにそよる
つらゆき

う色てうへハれるきはやさっさん　在原なりひらの朝臣

寛平のはきくの花とともせてまうけう

久方の雲のうへにてみる菊はあまつそらけるときにそあけられてつくまつるえ
この哥ハまき殿ごのうたれうけるときにそあけられてつくまつるえ

これさだ乃親王家哥合のうた

　　つゆのいろの朝臣

雨ふりてのちこそ菊の花ハおもへくく

寛平ハきさいの宮の哥合のうた

うつろ時花花とにあるうきくうつろ　大江千里

きくの花人をけるにこそ哥ハめ

仁寿に菊の千人のうたれうけるところ

けのそ子のうにさくうつろ　すうらの朝臣　寛元年後

すうらの朝臣　贈従四位の類

ハる乃ゆきあけぬれうつろ白菊ハ花あるめる涙のようつ

ハれてうすこ花うきくのあるまうけるところ　素性法師

きくの花のとこてくのひとてうかうとうろ

そとのう

花うつくまつはそーろ人の袖こそのこるべくもしけれ

おほさその池のうつろふきくのうつろふもよそ

ひと[redacted]つ菊とたにおもはさりけり

世中のはかなきことを思ひしらせの花とこそ

よみけり

秋ふかくにほふきくのうつろひもうつろはぬ我身を

——うきくの花をよそうる

凡河内躬恒

つゆにぬれてやなくらんはつもみぢするをきくの花

いろそふみこの歌は哥合のとき

よみ人しらす

いろいろに秋つきくとをひとへにも

仁和寺のきくの花うつし

れとおなせもとれかれ

秋ときけ

秋ふかき

ほらのやき

さきそめしやとのきくの花うつろひにけり

もとすゑ

さくらちるみちこそなけれ
ふるさとは
奥山のそきみちてもあるへきを
龍田河紅葉乱て流めり渡らは錦中やたえなむ
きつた河もみちそなかるる神なひのみむろの山にしくれしらし
藤原関雄
秋風ふきすちらめるしみらねは
こひしくはきてもみよとやたもとわけ更にやそとも
秋の月山邊をふてらせるは吹風ゝ
霜のたゝ夜のみきこそうつくしけれ
うへえの
初入の日
二条の后

田河水もみちるらし
よのう
もみちをうるれてこそ
ちやゆう秋代ときうすた
これさうのみこの
秋なひのみしうるこそ
きさらぎに
みう人なくてちりぬる奥山
秋のう
立ちひめたしうる神のお
をのとやまふすぐ
秋うふもみう
神なひのみ
うのれけうを

うせい
もみちをうるれてこそ紅葉(フカキ)流やをつくん
うちうらの朝た
ちやゆう秋代ときうすたる花かう紅ふのくるる年へ
これさうのみこの家の哥合のう
そうゆきの朝た
わうきみうるまでちらすくふらむれこの琴おちるまで
そでこね
秋なひのみしうるこそ秋のをゝ錦ときるや地こうすれ

きさらぎに
ひうゆき
みう人なくてちりぬる奥山のみうへにきなうを
叩のこの王
ひうゆき
立ちひめたしうる神のおれなこう秋の末葉ぬきちらめ
をのとやまふすぐ秋うふもみうをみそうう
つうゆき
秋うふもみう秋ぬきたしむれすしわれなんにそひや地する
神なひのみうをすきてうたれけうた河をやうけうれ
うのれけうをよのう

ゆく水とそらふるくもはきよそらのふ
おのづからにごりうき日よそろ
みそらふるくもはゆきもみちをとめてたゝけてゆくなら
ケつね

・冬哥

題しらず

よみ人しらず

龍田河錦おりかく秋の月をくれのるをたゝしてる

冬の哥とてよめる　源宗于朝臣

山たかみ冬きにけらしさまさりゆくそらをもかれぬとおもへば

題しらず

よみ人しらず

おほそらの月かとてあらけ冬のよもるこゑ

ゆふされば衣手さむしみよしのの山に雪やふるらん

今よりはつきそふらむしぐれやとるすきもるみこえ

春雪をかつらけの花ときゝなして

こゝの河よも今ちるらんたゝく山の雪けの水や今まさるらん

ゆく方とかつらのくらけれはこゝろ行人ゝもとゝめてそみる

我やとは雪ちりきてや過ぬらんかつらけれはひとゝもとゝめてそみる

雪ふれはこゝもかつらの花ときゝけるかなしらゆきのこゝろよりける

ちるのみこそうれしなれいかた河にうかへるふねをもとむる

春なれや山とす風のふくからにかつらの河の浪ぞたちそふ

寛平后時きさいの宮の歌合つゝ

藤原おきさと

紀貫之

白浪のわかうつ岸のまつなれや船をもとめてこゝらきぬらん

きえはてゝ又河水のまさるかなたゝく山の雪のしたけに

坂上是則

まかき結ふなれりせはやまかつらちるをみつゝもとゝめてましを

たゝく山風のかたえやをれぬらんまかつらちるをみつゝもとゝめてましを

池なからまかつらちるをみつゝもとゝめてましを

みつね

風吹ぬまかつらちるをみつゝもとゝめてましを

テイ

ゆきふりてとしのくれぬるときはなは
みち人もこずなりぬるものを

ふりくらすそらもゆきにやまぬれて
みちもしらにぬるものを

坂上これのり

ふりつもるみ山の白雪ゆきふりて人もかよはぬ
ものとこそおもへ

壬生忠岑

ふりくらすそらもゆきにやまぬれて
雪のふれるはてのあるらん

ゆきふりて人もかよはぬみちなれや
雪のつもりてとしのくれぬる

きよはらのふかや

ふるさとはよしのもちかく成ぬれば
ゆきふみわけてとふ人もなし

ふりくらすそらもゆきにやまぬれて
やまのみどりもみえずなりけり

坂上これのり

賀哥

題しらず　　読人しらず

わがきみはちよにやちよにさざれいしのいわおとなりてこけのむすまで

きみがためはつせのやまにうえたればふるきみにぞあえるべらなる

わがよはきみやちよにとやちよにとうのくてそのをまてばやちよもへぬべし

仁和の時僧正遍昭の七十の賀の時の哥

かくしつつちよもやすらにあそぶべしいはねのまつをかざしにはして

仁和の帝ときこえさせ

ちのかすよしろうをつれてにつくれをけるを
うの住をとくふかそうてしろろ

ちはやふる神やきり久しくふらぬ
ほてらなのれは雪もきえすして
——多みとのろ

さくら花ちりてしにけり
さくときへみこてをめのうちに大
井そ——けるひめのろ きのこいとの
ぬるかの武蔵ねとそ

在原業平朝臣

貞保二年歌合 清和第一

さくやすのみこのきさいの宮の五十の賀
つりろ屏風にさくらの木のもとに人の花見
ろこころかけをとものろ

きのつらゆき

いろふかすくら月日はおそくうつりて花
本集 仁徳天皇 延喜九年歌 母往古人 九種の名歌
もやすの力この年頃のうちの屏風のよこて
うきたろ

きのつらゆき

春くれはやとにまつさく梅をきみ
もとせろそうしろろ

素性法師

[illegible]

藤原三善か六十賀によみける

鶴龜を千とも八千とも在原
[illegible]

[illegible]

よの中世とまつにこそといひもてせのこけまさる
(滿子 四条高藤二女 奉養 延長七年 聖主 延二位 四位侍のかみ 右大将藤原朝臣の室 [illegible])

[illegible]

野わかなをよめる 在原

[illegible]

山たち雲井ふんゆきこらむ春やのゆきてかへる日そみき

夏

そらうきこゝろなくに郭公こゑ[illegible]

秋

住のえの松を秋風吹こすなよ
千鳥なくさの入江のこゑもまぜじ

秋くれはかりのつらねてなきわたるなり

冬

白雲のあなたにかりのこゑすなり
(文徳天皇 保明親王 延喜三年 誕生 四年 立太子 寛宮 [illegible])

雑別哥

題しらず

在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきかばいまかへりこむ

題しらず

よみ人しらず

すもろくにおもはばかもかあきかぜのふきうるときにあはざらむやは

ものらもろうらうらをふるさとにやどりてのよ

そらもなのめやはぬしてそあひろる心行をせきるとそ

曲侍らうかの朝臣

さとゝきくみこれ家にてふちもとのきよりあふれ
すゝふまそをけるけふもまつくるもけふけるころ
けふわれあすあふことをねやなけめん袖なぬれそ
とうた（同かりけるくよそのけふけるに
かゝるこゝろをえらわれをみこゝろくく
くもまへはるもしけふそころ

すゝしうきこゝろきおとをしきのつらゆき
きそそれ雲へそらをのらな冬也
くもまへはるもしけふそころ

在原一けるころ

わすれてなゝ我てけふもりくなやふたおそこゝろき
あつそれゝろくへ同そをけるくふふそてるうけるころ

なりくたゝおをもやけ初そゝろくへときみをたくてるやる
おもさこそくとわれしけるけふもあるころ

いたこのもつゆきなにてよりあつと万雄
あふさ式のせきもりきおるらけあすわるときみとそゝ
毛ゝすらに

唐衣今日もきつゝ（ゆきをいけめくきおゝ
この哥はあるくつゝさとすまそりておくらこゝろきいきそろ
（れすこゝろくをすてくくあまえそよそこゝろつゝけるゝ
とやうもゝそよそつゝけるゝ

ひとりまもりけるはすこしふりそそのきみそよ
てつゝけり　寵（テウ）　或本無此歌
あさみけよこきてみそよまのいたをわらはのまくらまくらを（ツツノ）
きのしたをさゝかりけるはふのうへにやてゝ
てあつ月そふりそゝけれいせのうみてゝ
けり
よこたへしてふたりこそねし
えろ〳〵あふみよめろあらな我やわすれしやとあ
わひをそなけくふのうへのすゝきのほにいてゝ
ふるやね
雲井にもなをふりをくれぬわろとふるはのみを

色のまさりけるはすゝきかな

白雲のこゑさかなふさわらひをる
みちのくにやたにかさるをとちて
人をわすれけるはすゝきかな
わすれてふとふうつにてもあるかな
あめのしたをりふるにつけてもわれ
京にまうてきてみちのくにまうてゝ

かろき心をにくみおもてそむけ
こひしきこともまらぬ名にこそありけれ
よそにのみこひやわたらんうつゝにも夢にも人をわすることなし
をとはやま人ちかくなれど
つらゆき

藤原のちかきをわれもしらなくに
うこにまどはすふうのをのこもさけ
藤原のうぢ

是貞 近衛之将 左兵衛督 大嘗会

元河内躬恒

もろともにおきてとしめよきえをてに秋乃わかれやあらぬ
平もとのり 元親 春宮亮

秋きりのたつたの山のもみぢ葉は
ふかきいろをもしらぬなるらん
ふかきよりあさきにうつるものなれば
心さしきとみえてうつろふ
かりがねのきてはなつにわすれがひ
ふみそへてやる人のこゝろを
ふかやぶのみちもなくにかれぬるは

源宗于 右近少将 寛

今はとおもふころかな

きてこそはへりにしかひもありけれ

藤原かねもり

藤原のこれとうもとをそこにおふさくらとこのそくさくら

けうもき

かのたてわかゆくえもしらぬ人のそらなる名にこそありけれ

たちえのちりちりまがひもしぬへくも

藤原かねすゑの朝臣

きみゆくこうちふりしくうめのはなよそにもまかふ心ちこそすれ

人の花ゝまかてまかりてのちつかはしける

僧正遍昭

けふくるよそへ

ゆくえもしらぬこゝろやそらへ

心のやりてからまかりてのちにつかはしける

遍昭法師

別とも心ちこそせね花のまに

ふるさくらもまさりこそすれ

けふにさくらの事のやりてのちに

僧正へんせう

山風ふさくらふきまきこそすれ南花のもとにて三首

ことらは云ともまろ〳〵くるくるとめ
仁和のみとしみまかりしころ
詠しよみ人しらず
あすてわたる波さへやしろしとや見ゆら
かくるのつゆをけぬきとめ
へてるもいつまのこれぬ
それをまりはさ月とをそて

つらゆき

秋はきぬとめにはさやかに見えねとも風の音にそおとろかれぬる
よみ人しらす
行むとへ人もとまらぬ秋かりにけるかねのおほきふけそものうらしてわかれ時
ふかやふる
わかれをしくもあるかなひとゝせをたに
別らす
あすしてわたる神のみつかきみなかる
限なくもしほよりもる神かせに
きくらやとゝめぬ春もたのれきあきを云

しひてゆく人をとゝめむさくら花いつれをみちとまとふまてちれ

しかの山こえにていしゐのもとにて物いひける人の

別ける折によめる　つらゆき

むすふ手のしつくにゝこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

道にあへりける人の車に物をいひつきてわかれける

所にてよめる　とものり

したのおひのみちはかた〳〵わかるともゆきめくりてもあはむとそおもふ

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月をみてよみける　あ倍仲麿

あまの原ふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも

この哥はむかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに
あまたのとしをへてえかへりまうてこさりけるをこのくにより又
つかひまかりいたりけるにたくひてまうてきなんとていてたちけるに
めいしうといふ所のうみへにてかのくにの人むまのはなむけしけり
よるになりて月のいとおもしろくさしいてたりけるをみてよめるとなむ
かたりつたふる

おきのくにゝなかされける時にふねにのりていてたつとて

京なる人のもとにつかはしける

小野さもり朝臣

よみ人志らず

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあれはるばるきぬるたひをしそおもふ

すわうまふこれいまあよりそこひけれこ
れるんこることてていひけるをきてていよろる
名おしおそいさましはんこをわう思人有やと
見しらす
北へゆくかりまろるをつれていらすいろる
この弁あるんたこをもろ
かりいるそすみけちもまかりにけるきけるをきてよろこるふ
ちにかるわれのるきけるをきてよろこるふ
あつまれこちら来てまろ
山かくす春の子んろうすきこみちにそくる
こ一のくにまかりけるみもらふとまてろろ

きこはつるはすあけれいこちるるふ名雪にろ野を
あれまくてらけろときこらにてよろ

みつね

いとにろ地るらなくたわれちろ
かしのそにまかりけるはこもにてあろ

みつね

秋をまむこをくはろ霜をちらひて草ろ枕かあまこひぬ
そちは人間のやまかりけるはやこの庵といふ
はとまりてゆふさりかけるそにあ

りゅうへ寺よりけさつかはしてよろ

ゆふつくよおもはつうきをさもまてけさこゝろもとめ

これうのみこのみことにおかけけるおまの

河とこゝろのそこにおもひけさそのこけ

うつそゝみこひけりてまてそうに

うとふやとよそさの月はせといひけしおろ

おとうらそそのけうふやとかんあまおうとに我きふ

みこのうをやこようてひてえせするうまれ

そもふけてよろ　きのおてつれ

ひとせにひとこふきます春まそいおとかへあらとう思

朱雀院のおうにおけるきくもけるとき

ふてよとけう

すかうの朝臣

こうひぬさをあへす春もりの紅葉の錦神なまに

素性法師

そしけふはけうてうの神をきる（きたり）みちにあけう神

やかへも

物名

ふるさと

心かけ君をやつねにふるさとの
なとめきます

藤原ふりゆきの朝臣

ふるさとのゆきの朝に
くるひすのこ鳥のなくらん

在原しけはる

はつせにまいりたまうとしけるひろけき袖にはつゆやどらんや

よみ人しらす

あふことのふしなかりせはうつせみのからにもたまをぬかましものを

かよはさくらん　つらゆき

かけそへつるたにさくらかなしくてかへさはまつそまされる

すもゝの花

今こそはうつろひぬれいつくにすとおもふあたりをながめてやみん

ふぢやなぎ

あふかたもなき袂にそうつろはむとおもひしれゆく雲のはてかな

ともの人

をのへゆく

みくまのゝうみにこぎいでゝなまのゆきてんとうたなまの本

よし人もとめた

村さきのいやまさきだまりすよるふしなん風つさむさに

あふ日かたら

かくけたらあひもれぬなみ人とてつゝめ恋ゆゑそこそきゝ

人のこゝろあひけるけくいわつらきふやもしるらめん

くらま

傳受つんせ

ちをめぐりはてくにたちもとまらすまろかと思らすてまろ

つらゆき

我こゝろこひそめつゝ花のえをたれもおらぬ人のをるらん

をみなへし

ものゝ

さらつゆをそゆめくやさかたの花にとはこと
あさ雪のをわけそめてや春の野に残るかんと今そしるある

栄雀院へをミまいらせたまひけるに

つゆをくらこゝぬらかうなく庭つにけん村をもとめ

きりかくのはなとたちこめてらなのをの草葉もわ

とゝのり

ふりいてゝさぬるはるの夜のゆめんとうつろひけ

よミ人志らす

人　まつたんのはる

わつやとの花ふうくそうたゝものそなの里はやゝてうくも

れなれ

あるとゝろそのむりかきろせんうとをいかゝ思ふと

けふこゝ　やゝの名寄春田

さらはふこゝや花ふとんしをこゝ春のうもゝ許を

二条式后春宮乃ゝやすんてゝ中ゆゝ時ふゝとゝけゝを

花をとりけるをとらまセたまひけるに

文屋やすひて

花乃本にあらそゝとゝきこゝのゝりにこのゝなゝ時ゝ

ふるさとのふもとの一のふくさとは仁安山のふもとの事
やまー
ほくさいきせんの雲にやまうこひつあそこかけ水のうつりゆき
空蝉（ウツセミ）のからなき
よこ人ふら源
からるくさ
平あつゆさ
ふりやね
こもるまで夢のみにくなくさまもうつにもけるあるこころと
花のころふとちるこれをもて雨のなるめる
さうもこのそはる高尚

人
いのちとてあをとのむよかけれいねりらたるくの人のむ
さ秋方てなる年けのくる方乃川きかのせ秋乃風
煙ちものとみそのをかの禁をれるもらしとなつけるもし
いさとろふはまのまにそ思つめそ人はなんて
あー　あめとろ三　五の衛そうさうと

あらきそのなりもまるつめすうき事にあひろうみちをはてゝ
からこそいふ春のてらの日よもろ

浪うちよせさらしとときこゆる暮れもらくやあらてまろ
ん

かねこのおはきこ

かうらにおそう浪ふくうつく紙表なれいうさきうる松そん竹そ
浪ふ花おきからさきそらそくそれ人の去と風やまろう

あおつねを保證覚

かうこたうろうさきこわらはじるおもふそのこうまつを

仟翁

人

かうやこは　　仟うゆき

うはまよりわうくうかとやうはうそんが冬ふうに雪れ白雲

よとこは

すいふきうをにをれい白雲れふせそろはてぬるふき

夏草うはけれうめまおうゆくうのきわうやうふ

かうらのこや　　源うてこす忠

秋うれ月れおうろうやいまうひうりを花とちすはうを

百和香　　よこうへ志うす

花とにおすうしれなれいうへ花はくわうしとう思

すミる

春霞るゝかよひちなりせは
をきた
流いつる音にたゝ波河むき
ちまき
のちまきくれてお
もをけ
よゝとゝのいけれいよ
ゝ乱のちゝふわくやそわけ

志けり

大江千里

僧聖寶（ニマンソウホウジ）

古今和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす

よゝとゝのきくやさ同ものおもふ

読人しらす

をとにのきくの一夜さのうは
白波のあとまきこす船も風
をそなふことゝきゝ相坂の関のこゝろに年とをゝ

素性法師

藤原勝臣（カツトノオミ）

在原もとゝ

はるをまちかねつゝ　ありそふのこまを農

あふとは雲井はるよるの神のをたきて立わたるか

　　けらゆき

かつみとをこゝろかたふたなしらけてすゝるまゆをよせん

ゆふれは雲のをりをりにあまつそらなる人ぞふる

　　續人もらす

こゝろをもてもひこされてわたつみのやへつゝすゝ

けれもなきをやなくとりのゆくへをしらぬ雲のはも

ちをやゆかしのやへつゝゆきゝをかたなきふたみしま

わつこゝそむるきりにみちをもとめん　思やれもります

すゝろなるたこの浦浪そめし日もまれなるきみをこひわひ

ゆふ川くよさすやをくの杜ほとゝきすなきてうつろふ

をしからんこゝろ永くもあらなくに

吉野河きりたちわたりゆくへなみ

をきもせもするにもあらぬこひわたるかな

心たゞみしゆく水のこゝろこひ一ねとも

たよりもあらなくにこひわたるかな

ひとりねすもしなくに紅の花のにほひもうつろはなくに

枕の野のおもふまゝにさく花のにやいてんおもふ人もが

わかうの梅のをつゝふ蕾もきこひもするかな

打ひしてうちむしふふみをあらそう恵
（ゐかるまろおもかるこひいくらそきおとゝふらせん
ようにしてこれいくそ一いひとのおもへふいさもすこん
春ムさきゆるこゝろをくくるへてこゝろをくく君うへやれふとけるえ
あけんたせこのおりくくなきくらしてふるおれ
夜ふ身をいふらにたなまをひとけちひようてなりけを
ゆるれいくそ一ひくき我袖おけんをきうろうて
けてえこゝからすいあらおとくをおゆくふとけら
秋の田もふこうく城こひさらうをくふりせん
あきの田よりのうくてふ（シテ）をのまたく我やとすて

ひとゝうち我うえあやる花すゝもとうふそこぶあと
あそゆきすいかてにて行てつ地思へすきろうる
おくらくすう北新のおさゆるゆさけのそうふそこの行

戀哥二

小野小町

つもよつゝそもりけり

あのまよゆきゝ朝戸
けくそとも袖にさまらぬ白玉人をこめおもふそらけを
ゝ

をゝのうら涙(なみた)そてた玉ゝすれやせきあへぬまつ
寛平御時(うんぜい)きさいの宮(うだ)の歌合のうた

藤原敏行朝臣

立わかれてくらゐ中ふもかよ夢(ゆめ)のたゝちあふてあらなむ
すみよし岸(きし)にうち波(なみ)ゝ

ものへゆき

わすらしいさ山かくれのまてしはれやいけさまさるへき

紀とものり

よのへまとけるくえゆふ夜ゝまてしはしもやすらふ
ゆふさしおもるものけふをゆめしるへをみねやくのつれなき
さの舟にをくりもてゆくほとそわかれのかなしさ
我やとのさくらのもみち
河つせにふくそまもとつみうすれて人のこられぬ
こふつしみれ

かまくらにぬる白雲ゝ

藤原たゝこ

きみこふ滝へとこふみちわけ
しめるしのらきもやまとふくるし玉ゐを許わそんといけ南
わひぬれいのそ口すれとまてとも考とも知つゐおろなる

つるくもぬてとさそそと立
立てきこひてまつしまもらぬやのらん

読人しらす

君こふ滝なくくから衣ぬれてそ
ものつらゆき

よともふるれてもも滅河冬こをりみわもり

夢ちにと高やをくらんとすらかよう神へひちそうの男
素性法師

はつふくて夢にとみんつるよのあしよものところ秋うる

ゐ原そ〜女さ

いはもの滅なの世はから衣しの沖神を志めらさらう

大江千里

ぬふきて〜ひらく〜と暮とふ見れ神〜〜こん〜

そ〜ゆき朝ほ

ひらくとくぬやるもの世歌ろぬとをるくそ〜こ〜らん

ひらゆき

さ風ふこすきをたゝん部ろくねらあるこふすきみ

秋霧へはてゝゆくらめくらもおそくに

九河内躬恒

もゝとこをにてふるあとも波のこゝろにたれ

清原あつみ

秋るれ心よりしまてるく庵に我おとらめやふとをめるよハ

ふれと人ことれ家人寄合人うく

つらゆき

秋風ふ吹ふ花ゝ人らくさこおを思ふか

よしへもとつす

もらす

あまのにふれてさみる花ゝ

みつね

ひさまてゝ物をもふ人の秋人ゝ(田イ)れいの葉ふうよれふ人

あつみ

人をおとふふをあらめをふくて井おのこをきやふる・

きこれ

秋風ふ吹すとふふくのこりかろん

ゆきつら

まこるろとのさなあるふれ一ふるらとにゆるやこり

ふまたかふくふつふけ

こゝろよふらの人さくらふ

やまひけるころ、人〻とふみ
うせてとそこすこしきこえてつかはしける
はるかなる野を来ふをきりそ友とそ思ふ
題しらす
我立てそふ人のさくらをおしむ
ひれをふりけむ
今河のほとりにおりゐて旅人とともにそこにかれいひ
なとつかふまつりけるに、その河のほとりに
おもしろき花のむらかりさけりけるを、
折てこれ
かきつはた
唐衣きつゝなれにしつましあれはるはるきぬるたひをしそおもふ
とよめりけれは、皆人かれいひのうへに涙
おとしてほとにぬれにけり
駿河なる
宇津の山にて
わかこひてゆく道はこゝにあつまくに迷ふわれかな
名にしおはゝいととくとうたてのみ見つゝゆけは
白玉とみつゝ歌よみけるを聞て
わすれ草我も思ふをしるらめや
かたみにせよとつゝみやはする
みかはの

風すごく吹きたる白雲の
月ゆく空の身をかぎる
ならばこそ
こころなぐさむ
世中の
つらゆき
はるさめは
ものもおもはぬ
ひとしれぬ
まぶしてやみなん
我こひを
ゆくへもしらぬ
わがのこころ
あふやぬ

花をのみ
命にてまちくらしつる
あやめぐさ
我こひをゆくへもしらぬ
わがのこころ
あふやぬ

今ぞやこしぬまも我わひんとするのそ
まろのちゝはゝ

そのゝつてあそてそゆゝつはにこゝろをへつゝそ
みつ柄

命やいかてそはものゝ我あのまゝ
そものを

戀哥三

やまひのみしらるゝ人にものいひそめ
ちよあえんうかちはふよりてつりけり

春原業平朝臣

なきと世す祢を世てよる我そ
るひるの朝臣の家にあるおんなのもとにて

しける

われてくるまゝ我何祢のをれてあふもの
かの女かへりてよめる

みるひるの朝臣

あさごろも袖にしつらう風何ぞ
　　題志賀旅宿
よろづたをこころとくつくしてもいつらにゆきてはまるものぞ
あそあのゆるーにゆきとつまをこの詩をあつめのぞく梅かも
　　ありいらの朝臣
秋の野にやどりもあそうし衣うしろもあそうしけり
　　小野小町
人ろろるきりつあとうとこそあはやかれなそ雲ゆくる
　　源宇干朝臣
あくすてこよひあけるは春なのろくやをつらと思
みぬひとそ
晨明つれなくみえし別れより暁ばかり憂きものはなし
　　ありつらのもとそ
逢まつきてうる涙なれやうらみそのそうらみつるけるに
　　よしみねのむすめ
おそくとも風ふきたにはなれやあすまでまし
　　そせみ法
みちのくはあそこいつなるそうの河きるのろとそいるろ
みけるのあるすもと

よしへ

あけぬとてかつ逢ことにこまどひの
なれてる涙とふるうちもつて

寛平后宮

三のくの人わすれなでしこを折うへて

寛平后宮

ほとゝきす夢かうつゝかあさ露の
むすぶをあけしきのふのちぎりを

大江千里

けさもとひ来ぬ人をいかにとそらにあふ
なみだのつゆやそでつゝみけん

みつね

なみだ川夢も残らぬこもりくの
泊瀬の仲間のくまもうかぶる

よしへ

ありけりとみるはやすふをそうらふ
やすくてもとひてみたにと

をこせのひろ

よしへ

ゆうちふいあーをやすすかよくつてにしてそろえんてとふ
おらふ

なんとえんぎでしれかうけしかい河とえんぎらしこうわさら称
なきつてもうはやきみとるうーうをんうつてみせきそひえん
寛平七年時さらうえんぎのうー

紅のうふいそてかれてれのきものそ
影志らす

冬うえぶすしにをるくうもよふとふまる
さしけまにをくはう若うえをとしこしみ消くとえふこえ

讀人志らす

山ふをとてよんのーらくわうこひうもこうきおうのうんす
きよからふふやぬ

ケつちうる風ひうまとあひうることケうらたうをこおて
平貞文

志ふえはうらすとをうそうこきよう流てせにすんと思へ
とものそ

しらのとこおれいうーなんてみとれんくるとうそう
我立そのいうそていふ橋うえにそめんーし

よしへーらす

おほくさの我名妻みむ世をうみくだんさすく

枕ものまくらべなきこゝろを滅せきあすもこゝろ

手臭文

よさくらす

風吹ば打靡なしやねぬあらそはれてをきめくらるゝ

池水もしる秋なりけりこの哥はあるひとのいまうるゝ

あふさはもまくらをあさみかたそすゝしとあらそふゆふ

むらとてさそ花にけりかすみよさくらるゝ秋のとの

きみよりもおほは花小暮霞野はこよひらみらふけり

仲智

きみといへ枕にせよわれもおほの秋らおらふらん

古今和歌集巻第十四

戀哥四

よさくらす

みちのくのあさかのまゆみひく人をこゝろやつらん

よさくらす

影もさらす

藤原敦行朝臣

在原業平朝臣

いかけらのまさせいらっしゃるものなれからま
いりまうとおもふあらかなまよう我ぃこのむ

素性法師

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ

寛平御時きさいの宮の歌合せの
せうの
歌

もろこしまでもいかでか思ひおこすらん

よみ人しらず

この世をばいとふものからなくなくぞ猶すみかねは山の奥

おもてこそわたりなるなるみのうらなきこそ
思ふ人我をうらむる歟

そこすゆくあすうの河ふちせにこそあれ
この寺あるのいそくるこころこのうちの寺

よみ人しらず

なにはがたみじかよのまのあしのゆゑもみおつくしてや人のわたらん

よみ人しらず

紅の花のにほひはうつるとも
かならず君をわすれやはする

よみ人しらず

思ひてこしきはかはらとやなきさ
おのれはいまもきさいすまするにはまかなむ
かりをこもらけるふしとおほえあつそてすて
よこてをそうけるる　曲借花原よるうの朝臣
をのめこ本ふしわつまふられをきこゆる
ね
今ととそかすこの歌ふろひとまてをのうねらかとやうん
玉柏（ホソ）の道はつのうまてはおもひやるとも
よろかう朝臣
行道院の花おもしろきとき、
能有　文徳御代　在官在大将
續古今

戀哥五

花すゝきわれこそまねけ旦つゆをおきて
よそにのこさじ　　あきはぎ

我こゝろ我をもとめてやまきと世をやゝん
久方のあまのかぐやまにはすまるゝ旦つゆ
乃てをうまゝこゝもまくらの　　ゆめ

雲ゐるゝ人をまつらめあさつゆの世をやゝん
花ゝんよりぬゝ　　ゆめ

あひふあひて地なふゝ神こやゝる月よめをかみる
秋ふらてをくし就やゝ神のゝ世をやゝん
すゝきのまの小ゝやき衣ゝ
山ゝみねのわゝこしからに
あひこねはこひこそまされみる世河ふてゝ思ふ

東原ふゝしらの朝ゝ
ふいそゝ
東原男すゝ朝臣
九河内みつね
をとる

よゝとらす

伊勢

暁つきぬ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

こゑをおもてにたてゝ秋風いたくふきたるにけさうすきこ
ひしくもあるにやとおもひてよめる

行きゝとおもひしほどにうたゝねのあかつきはやもなりにけるかな

なかひらの朝臣

こゝろいるかたにしあらねばしかすがにながめてのみぞ月日はすぐる

雲林院のみこ　常康親王集ニ

ふきまよふ野風をよしと秋はきぬ露をぞたまのをとはなりける

小野さとき　良樹

今こそはわが思ひ妻もあれをのこまさり

人を思ふやこゝろはこゝろにしたがへるものにしあれば

なかひらの朝臣

こゝろにもこゝろあらずてあひみしはゆめかうつゝかまたはゆめか

ゆふされはそでのうへにおく露のよそでにかけてつれなかるらん

雲のうへにてそらをながめてよめる

なかひらの朝臣

ゆきかへりそらにのみしてふる雪はわがふるさとにいとゞしくふる

唐衣（カサ）おしなべふこう内つれめか付てのゝやいこふんと思ふ

さまのを

秋風のとわけてをぬるらん

ほまるくなるゝ〳〵ものけるせきみらるゝ

こらろこゝあひてけるこゝろを

そこらをこらてのちふらんとおもふよふて

つゝりける

源宇于朝臣（ムチトキ）

きそうふんをゝ城んてうかつにけるきんまつて

長衡　藤原高経朝臣女

ありわてけるゝ〳〵

にけるちふをふしをさして

こゝろあれ

時まてかれなくをのゝちに

想ひけるこゝろのひろさすらける

城をよろる

みれてとわるまをかりせうしてをきまゝ

さまのを

秋ふあのまきてくまのなら流てなれさまるゝ

よふんちらす

伊勢

なる世にありてゆくへのおぼつかなきこころつかひをわすれ
吉野山こずえの花をたづねても
みつれ
よしこころす
世を体よりの心ばえをうらみ有る
べきこころうにくはまことにうそからまことやや
いろんてらふ独り世をのがれんはやくいてまふまれ
我のこや世をうくはすてるもの
こゝろ
よしこころす
ものふともかなしきものをいふ世もあるまちりぬる恋とこゝろみろ
酒はそもみやし我等の義とやいひそやみる
よしこころす
恋まかなしき心すてゝ
寛平御時御屏風よ
まきらす
わすれぬるふとをこゝな待と思
そうらす
うせうは
そうらす

恋てもおきてもゆめはかよふらすて
（カヽミ）
ゆくえなくふきとこをこそ吹ふみゆくと行ふらすて

續くしらす

わらこ入わら毛こすゐこ立つわあまもすもてふくらみつゝふ
わらを田とあらすきかつてそくのゝをミてころやまろ
有うえ乃はまよことたのそいわそてまの野に猪
ありつゝら言丹城さしてゆく鳥乃名とさるわ毛野乃
三ねてまこつゝらもこのはゝ乃わこあるわしき
秋風乃まこゆゝきぬうちなひくもしそのふつ毛野乃
小前

秋風小ゆゝのこころうきは逢ねもするくるものを思ふ

平貞文

あき風乃まさ毛なみてそ寂らし郎
よゝくとらて

秋ちゝのふにゝき——
ゆすらそ毛をもちゐ乃
みさこうゑもにかよふ

坂こえのゝ

あふこ我なら乃りなるつて立わるま小帝うにけるゝ
ゝゝのそ
ゝゝそとらけあるゝ

流てはつもせぬ山井よりおつるしら糸の河乃しらなみ

積人しらす

古今和歌集巻第十三

春傷奇

ゆく春のそらおしめどもとまらにけりいつかきてとか

小野たゝむらの朝臣

ゆく春をたれしらせてか鶯の谷のふかくにうつりそめけん

さきちるをおしむ心をしる人は

にをそふりける春雨

そせい法師 近江の講師不詳人 市下ろし 寛蓮

[illegible]

雪稱もらをみてもすくさの浦のとけありたにそて

澤まの野へのさくらくあらなくに

花原のそまのつくりくあらなくに

てうの窓ふつくりくあらなくに

おもてをねてそをけるくあらなくに

おもわれをはくあらなくに

きのつらゆき

傳教勝延（ツ暗誉）寛平三年二月薨五十

かじつけのそれに

夢とこそいふなるものを思けるかな

おもわれてなるくあらなくに

なるらんふるさのくやいかに夢といふんけるかき世をもうつゝ

あふまてにけるみよとや

みよくの帝

世とせけはやもてるうそとけりわれとともるる

ぬちらくぬさくぬさくもりあけるくの

ぬちにけるときふるらんふつゝかそよる

閑院

はたらくらやちものかまはなるをかなるをめ

きのふもけふも

あすもらの日もおなじことろ

つゆき

そでみれ

叶をおれ松へ人のわろもあろ

ちかわひてよろ　九河内船恒

秋の月昨夜ふかくてみちぬ

らくかもひてすろ　ことみれ

旅ころもはつとついひの夜のそまをとろりけろ

おもひおけろそのおもひでらけりみられ

つゆき

あさあのかそ白かりそたらもせやをなしみろふ

おそひおけろ今をそらひふまりてろ

そでみれ

すころのきみたまとかきなれやすす海のそこのなる

女ちやの昔ひそ山てらふおけろをろのふら

いつそもわれ松へよろ

よしろすもらす

あしまろに海そころの衣の袖のひろかりす

諏訪乃子池のそらの雲をミてろ

水のおもかげにつく花の影
深きものみえの出園忘の月のころ

なぬかのきつまさの谷にやすらひて

文屋康秀

深草の里のあれはてぬる日はくれはてぬとやあらむ
つゆけき我袖同よりあまりてこぼれまさらむ世にもあらじと
すてひとのこにのりてうらむるをきゝて
ふくからにあきのくさきのしをるれはむへ山風をあらしといふらむ
りやうこひけるひとのもとへ

僧正遍昭

みるひとの花の衣をうらめしくこけのたもとをかすめてそいぬる
河原のおとゝのまかりけるふみやらんをもちさしもまかりてのち
ほとなくてかの家ふさかりてのちのかりの
我宿の草葉もかれてうつろへるうきをしるらんことのかなしさ

近院右のおとゝ

うちとけてこしくもあるかうたゝねの朝けの雨にきみをおくりて
うちとのたうつねの朝けの雨にいとゝきぬれてゆくきみかな

雑歌上

題しらず

わらはにてあそびしところあまたみえけるを奥に今かきつけてもちいでて侍ければ

藤原これもと

あまのかるもにすむてふなにしおはばいまはたおもひわすれなむ

題しらず

よみ人しらず

つれもなくみえてかへるあしかきのまたあるものと人をしらなん

かひのくにあしかきといふところにまかりたりけるにかきのもとにたてりけるをみてよめる

在原一けん

まくとるにけれはよそにもりてみよ恋しきやとはかりなるみを

雑歌上

題しらず

わらはにてあそびしところあまたみえけるを奥に今かきつけてもちいでて侍ければ

藤原これもと

あまのかるもにすむてふなにしおはばいまはたおもひわすれなむ

題しらず

よみ人しらず

つれもなくみえてかへるあしかきのまたあるものと人をしらなん

かひのくにあしかきといふところにまかりたりけるにかきのもとにたてりけるをみてよめる

在原一けん

まくとるにけれはよそにもりてみよ恋しきやとはかりなるみを

かさふとらまく丹せる衣い唐錦にますくれきおにう有ける
うれまく枕るにて行まん虎衣ますゆこうふれてとそまを
限るまき衣うとめにてまおまにうあのけるあ
あるつのそくこの寄ふさまおまもちまきこのを
歎乃ひともとにもさうなはこるうらあれそみち
うねなうし枕うれとくとくとそ結けるへよ人まねとくとそ
よこそやのけう
ひらさきつ海こまみはうそ小野るくまそうれなりけう
大納言ふちらのくよつれの朝臣宰相う中納言に
ものけう時ふうめねこくまねとくとそよめる

近院右のおおいまもちきこ 子時大納言、源博、室天皇后

行幸ふかみよるまつう文つませそいうのみとふ
所にもの枯けう残りまふかうふれりけれ
よろこひつうとすとそつもーけう

あるへいはみち

日乃ひりやうねの様乃ちにけにおるさきみち
二条のきさきのまうく東宮のうなん市とやけう時
おもてうのふまてなひけう日もう

ありはらの朝臣

田むらのこうしの時は（雄雌）斉院より（従五位ノ）女房利子のみこをもらひあやまりいひて斉院をかへつらねとしけるをうのことやうしれいなからんをとひろのけるよ

おほうら城てらも月はあけれどもいりあひの鐘はなほつくなり

利子

いろかこころのはなのてりかはもいつへの野辺も見ゆるなりけり

いけ（ぜ）つくりをさまもいやしきやうなれとこゝろさうのれ我もむすこにおとこ（ア）さうゆ（ア）（ア）（ア）

世中ふぬてある物は（ア）風のおとさへ秋にたえぬる音のうれしき

おほあらきの（ア）

入そさらあさのをふの（ア）

かうふれはまくらの地をそうしてこそ

をしてそやおにいりぬやくしかた

入れほとゝきす（ア）

おらくうすゝしせはかな

このみつの哥書あり（ア）

ゆくさまふ年もゆる人とりもあつ

ちはやふる宇治の橋守なれをしそあはれとは思年のへぬれは

我見ても久しくなりぬすみのえの岸の姫松いく世へぬらん

住吉の岸の姫松人ならはいく代かへしととはまし物を

梓弓いそへのこまつたか世にかよろつ世かねてたねをまきけん

此歌ハある人のいはく柿本の人まろか也

かくしつゝよをやつくさむたかさこのをのへにたてる松ならなくに

藤原おきかせ

たれをかもしる人にせん高さこの松も昔の友ならなくに

よみ人しらす

わたつ海のおきつしほあひにうかふあわのきえぬ物からよる方もなし

わたつ海のかさしにさせる白妙の浪もてゆへるあはちしま山

わたのはらよせくる浪のしはしも見まくのほしき玉津嶋かも

難波かたしほみちくらしあまころもたみのゝ嶋にたつなきわたる

つらゆきかいつみのくにゝ侍ける時にやまとよりこえ
まうてきてよみてつかはしける

藤原たゝふさ

きみを思ひおきつのはまになくたつのたつねくれはそありとたにきく

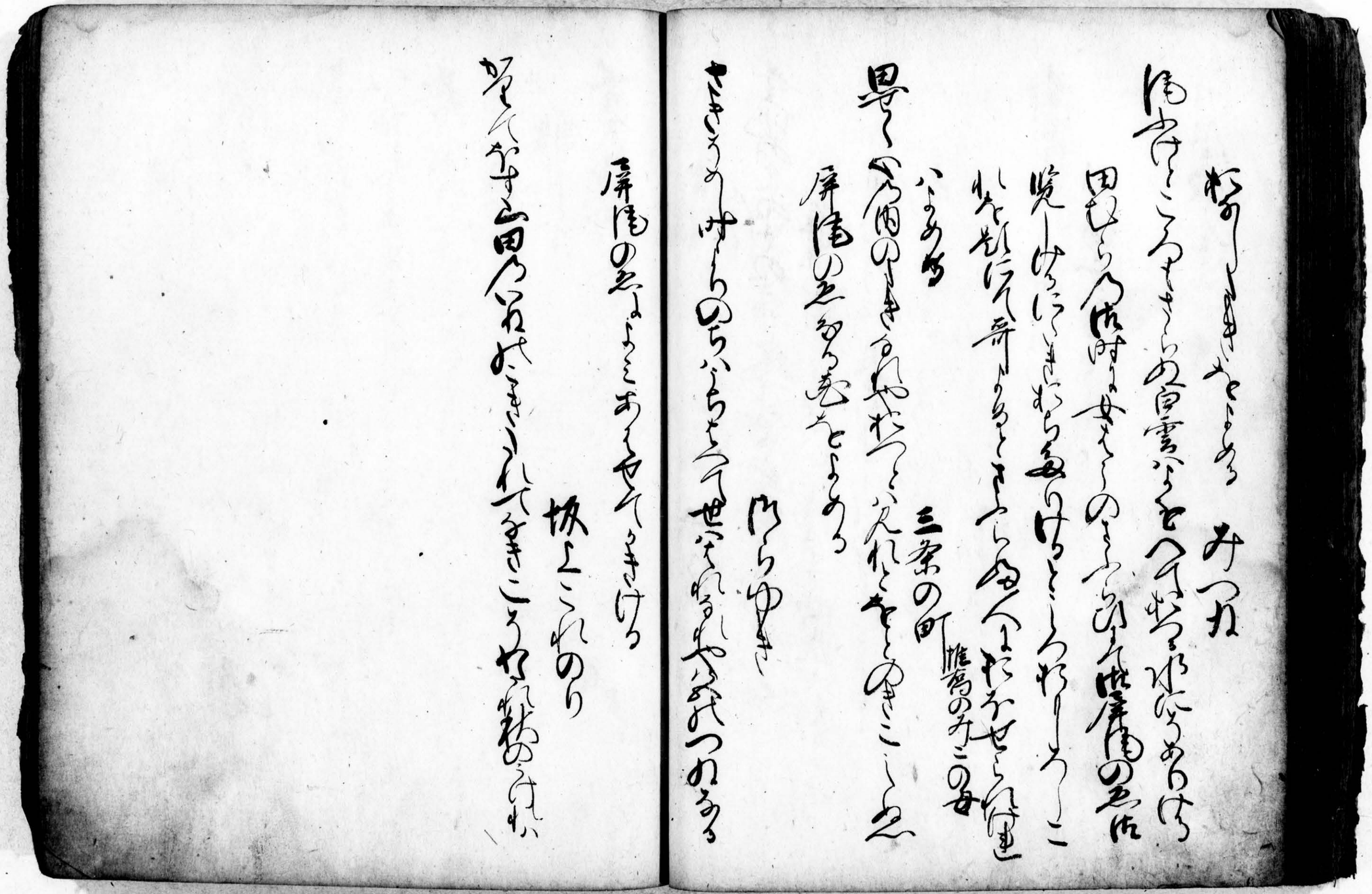
返し

つらゆき

おきつ浪たかしのはまのはま松の名にこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

なにはかたおふるたまもをかりそめのあまとそわれはなりぬへらなる



古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず

読人しらず

世中のかたにつねなきものからはきのふもかくおもひくらしつ

いとせめてもあらばわが身をうぐひすの鳴つる声にまかせてしがな

鳴てさへ物うかるべきうぐひすの声にまかせて世中のがれ

をのくたちもとらの刻に

おしのかとに物行時京くらのかりけるくるつ

をのこども

なかばやぶれたるわれかめのうへにあるを
見てよめる　　在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばありま山
ゐなの笹原風吹けばいでそよ人を
忘れやはする

をのはるこを

おもひこそこしかのしほやきわびぬ
ものさへ身をこがすころ

平さだふん

世にふるはくるしきものと見えてなを
きてけれないのらぬまさりけり

ゑやちちはゝ紀貫樹

ゆくへなきこのみをこいて
時ならぬ雪ふるのみをこいて
ゆくへなきこのみをこいて

清原ふかやぶ

ひとりおもふ谷にふる雪もよろぼひぬ
かれゆく野べの草のつまとも
しら露もまだ消えやらぬ程なれば
今日もかくてや暮れぬべからん

行路

きのふこそ早苗とりしかいつのまに
稲葉そよぎて秋風の吹く
のはぎ尾花さきそめしより
かしこき御世とおもへども
なれそめてしかば
今さらにうとくもあらず
物と今はまんさとをかはすとふかは

これやこのうたにはかなきをかしらの
てをのこといふ歌よみ仲間
おそしとなげくふぢ衣の
いとせめてうらみけるふしもあらんとそ
てをにぎりてうちふしてなみだを
てまりてきてとりけるつかつ
わすれていもうとのうへまでおもひ
隅堂のさとにたよりて京へまでそこそこ
けるとかやうにてをとりて
年をてすごしつゝ故郷のそらの

野とるらはうらとそうて年ふる人からにやまこころ
らん

新しき

我なまこ雑波乃つらにありしふるもまき
この寺さある山もこありけりとうのすとこと
くするりくれいるようとうみつのてらふりて
あまふるりてよこてれとこふつくせりけるとみつ
ゆ

子ふかさに雪もなきに雪ありけるを
今さらふるふる人もあらじ

みつね

ともちらひさしうまてこころもとなしとふ
てつかはしける

かうやのおほきおとゝ雪井おもしろくふりけるを
今とそひさしうあるけるおりにみれ
ばよめる

あをやまにはな遅らんとおもへるを
しねをのおやらかうる花やさくらん
雪乃ふりけるをそのおとゝのもとにつかはしける時に
しつれをいかるおとゝのもとにうる
きみなをし雪とつらゝにおもはゝ

野とならはうつそうそうて年ふかくなにやまさとふらん

新しらす

我やとき雑波つらにありけるみつのあまそるまで

この寄さある山もとにありけるのみとこと

くするるれいるみつのてらふるまりて

あまふるりてよそてとふつらてせりけるとみしつ

ひ

みちかさ雨もなきに袖ぬれいつことうのあまそうハ

今さらふるまて人もおえすやとりせらてよ

ともちうひさしまてこさりけるつゆけき

みつれ

水の泡かおるる頃のまき草井

今をそひさしあるけるおりよりみれ

ハるる

あさそのまやにけん思ふらるるる袖のやうるるる

しねをのおならかうもまたけるの時に

雪のうりけるをそてをのの思るふこのまのとそる

しつれをいひけるおうるにるる

きみのおりの雪とつらふのまいのらふるまへ

君をのみ（ムネ／カ）（ロ）
宗岳大頼
うらむりけるひとに
思ふこと白山ならねどいはぬまに
影にうすらく
きのつらゆき
さこてこにわつよハへもんすきそ
わつかいふわつかこしらへてくらしまをすきなてる
きせんほう
我いろにそめこころもすゝしせをとらんとへいふより
よしみねのむねあき

おしかけをおそれいく世乃やとるれやすらふ人のとをかな
おとつれありけるあけかた時よあれしある家よ女乃琴ひきけるを
きてそこそいれてきけ
よしみねのむねあき
よしこれ乃しわさ
ひとのすむやまとへゆく人にことつてよ
けふたにふるらの京よやとしてけるはる
二条　院うるの朝乃女
人ゆゑすきをいとしてうらむる乃をこそまさる
ものおもふ
```
```

世中にふれはさてわすらんゆきとまるとも
相坂の関のあらしに吹けとゆく
ほとゝきすなくこゑまちてよめる
家をとてよめる

あすか河ふちにはあらぬわかやとも世たのうきゆくあさせ
かな
川くしに行かふ時よめる
とよ京にかへりてよみてこゝらけるもの
ゆく河のみなそこもなくすめるものゝ
きのとものり

女ともらとえのかうたわれてのちよつかり
ける
みちのく 橘くすこの行女
あるとき神のまうでにや入給ひけん
寛平御時よりつかうまつりて
に東宮のさふらひなりてをのことえさせ
にまうけける
おとゝのまうけにとうしてもちてまゐりたり
ける
ちちはゝふさ
尾張にまかりける時に名ごりおしみてよめる
わかこゝろ奇をもとめて大和なる国なりけるの

ひと一ぢ君が春うすみどりに
しるしをけるはるの
つみてそまつるけふ
河内

行幸

荒原かちとん

古今和歌集巻第十九

雑躰

短歌

題しらず

績人志良良

おふことの
まれなる
なをなほ
なつこの
なきを
なほへつる
なわに

七条きさいの宮の
おほつぼねの
いせのあまも
かきつばた
はるばる
われなく
花すすき
ほろろ
旋頭哥

作者

あれのみまもる
舟なれば
きてとふ人の
妹のりて
よのはてなく
まねくさけて
ふかしわたり
ようにこそみろ

よしこもらす

こもりなす
もくさけて

春はれて野辺のまさく
きてなのるまで

題しらず

はつせ河
人とあひえん

こもりなす
えらばす
かきわたり
花のうへかや

かつとあるまで
すまじ

きみをおもふ　こかくれ
くものうつろひ　うつろひけり

誹諧歌

影おもふ

むろの木ふかくうゑこめ思ふ人を
うせやなうう

山吹花咲　うめや桜
いそなくうぐひすをしれかしこまりて

赤染衛門

七月許のあさの朝に

いつとまちくらしはてつるものなれど
あまのかなたと聞ぞかなしき

影ふまず

凡河内躬恒

ひろとなりまくにおけるうら秋なりてよめる

秋のにさまざまおほかるつゆじもの
借心うせず

おきそへるのにやどる女郎花
秋霧のたてるをうらみて

よみ人しらず

花と見てをらんとすれば女郎花

寛平御時きさいの宮の
歌合のうた
在原元方
年のうちに春はきにけり
ひとゝせを去年とやいはん
今年とやいはん
紀貫之
ふる雪のみのしろ衣
うちきつゝ
春たつけふはよしの山
みん
凡河内躬恒
春やとき花やおそきと
聞わかむ
鶯だにも鳴つゝ
ありこせぬ山
藤原興風
たれこめて春の行衛
しらぬまに
花のさかりは
こゝろ
きのとし
春霞たなびく山の
さくら花
うつろはむとや
色のまさるは
きのとも
ちりぬとも
香をだにのこせ
梅の花
にほひ
人にあくまで
折る人の
たもとやは
ものこゝろ

寛平n时もにさらのこおれ手合のて、

春霞うみひくの(へか手こたもるろみて北へとつらやと
　　引
なくとも我こえましわれ春霞かすみ
　　よこくもいす

春野ゝ(サヘノ)付き草摘ム子こいとしきまでのおもてこと
　　平貞文

秋の野にまるまで庵ムすとへてるわこいひとうく
　　もらひと

うれ

せひのなひとにこすき衣おれいしのん和こくいあらめ
　　しこれ

かなれめくくらねるかふかてふかふ
　　ふこくもらす

こゝろはもてすとやはつひれめるう世中のいまたなきう
おもてふくれまてに三かくれけるこしくる
もてと宗なるすくのこいるれいなやまとは思こふ
我そのまもてつまくあくやくやくやくて
われを思くもとそやくやもくの我とまるな

一本うす

古今和歌集巻第二十

大哥 前中哥

志賀つゝを

はつ山ちゝてふれかゝる嶋こまうくるゝ
神あそびのうた
さゝりものうた

神うまの山ぬしの山ぬしの採ふ秋のまんにけりあのうち
志ゝやふいとけれせおさまき秋のまねもし
ゆきさくらあしたの山のやまんとひもみえさにふかうらせう
みよいおもれなうらうとふ山のうまさきへかつらぬまに行り
こらうくおあらうまもつのふすそくらこゝのみに
うくとよいみ乃一水さとうくまねこさおひけり

ひろそうく
さくうくまうくま河よこまてうて行水ひうけてたゝえ
かうものうた
あとやまとかくいたらてくるのまうめてふきもうの名さ
まねうくまの山ふ山おひうせるかう谷河のそのやけさ
この音い第私のうくのまひのうくのうた
養作やうくうさらふさらにわうふてうつまてに
これい水のれのうくみまさのうくのうた
みのくたせきの藤う庄さしすて奈ふつゝむうつま作
これい元慶のうくのみのうくのうた

きみを世かまわあらし
れい仁和のいく
あふことのみかをも
れい今とのいく
東哥
大伴家持
みちのくう
あさまをたちそ
みちのくいかれ
わせことみやこ
おろさきうの
みさらいみさと
をかこ河のそれ
きみとそれあ
さゝみう
こゝろまのいろ
ひちう
つはねのこのか
川くこのをゝ
かりう

巻第十　物名部

ひくらし

うぬ人の文木ひくらし

在郭さ　空蝉さこ

つらゆき

腸（カハ）（ワタ）

巻第十一

思てふことのなほそへ竹
そとかりひろのひとよ井て四つ瀬こいたなまそうて
わせこゝろもきよものせたゝ今のかまのあそもと
陳養父こゝろもつくるもそひてとるもしてゝ下
けらのまき
みらゝ山こたなゆふすのそゆまにたなそねこいわすれさ

古今和歌集序

夫和哥者託其根於心地發其華於詞林者也今之
在世不能無為思慮非遷哀樂相感感生於志詠
形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷
可以蘂憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於
和哥和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰
雅六曰頌唯人之所感物形中情之今樹之雜也
曲折各蘂哥謡物皆有之自然之理也故不假人力
時質人淳情欲分和哥未分遠乎素戔鳥尊出
雲國始有三十一字之詠今之哥之作也其後雖

天神之孫海童之女莫不以和哥通情者多矣仍
此陸大興長哥短哥詠頭混本之類雜矣此原
流漸繁辭旨猶拙才雲之樹生自寸苗之煙浮天之遠
於一滴之露如雖波清之什獻
太子或事開神異
天皇富倩河之倫歟
鳥入雲去但見上古哥女存古質之語事為有用
之徹徒為教形之端古
天子母良辰美景詔侍臣預宴者獻和哥春屋
之情由斯可見賢愚之性於是乎おかし所以隨民之歌擇
士之才也

天武天皇第二皇子
舊大津皇子詩賦詞人才子慕風連塵
柿彼淡家之字紀我日域之俗式業一改和哥漸
衰姓猶有之師柿本大夫者高振神妙之思獨步
古今之間有山邊赤人者並和哥仙其餘業和
哥右縮之不絕及彼時變流人貴遷淳詞雲
興數流歌頌其事業稍衰有好色之
歌人然其花鳥之使気各以為活計之謀筆
為婦人之右雖進大夫之前近代在風右從之
人猶長短不同猶以可辨華山傷宅得哥所花芝
詞華自少更如前書好女徒動人情在原中將之

哥其情有餘其詞不盡如業平雖少歌之有意
無文琳神物然其所近俗如賢人之着野衣宇治山
僧撰之喜其詞華麗殊勝之着尾停滞如尘秋日過暁
雲小野小町之三首古衣通姫之流也就艶之中大友黒主之歌古體也大友
如病婦之着花粉大友黒主之歌古體也大友黒主之歌古體也
湖有逸興然其詞鄙如田夫之息花前也以此姓流
風者不可勝數其大底皆以艶為基不知和哥之趣
者也俗人爭事栄利不用詠和哥悲哉雖貴無
如将富餘金錢之骨未腐於七十名之誠世之適為
後世被知者唯和哥之人而已何之恨乎這人今実歎慣

神明也青平城天子詔侍臣令撰万葉集自尒業時
歴十代数百年其後和哥幸不破採用雖風流
如野宰相軽情如在納言之眷尒絶才圓如斯
道顕
陛下治宇于今九載仁流朽壌之外恵茂枯波
山之陰潤霑為瀬之叢密而巖厳之頃
澤流而長為巌之頃
紀反則御書所預紀貫之兼而撰古今和歌集并古来雅哥
右衛門府生壬生忠岑等各献家集并古来雅哥
曰續万葉集者重有詔部撰之所奉勅撰二十

著名曰古今和哥集臣下詞可著花之艷名歟然
我之長況哉進恐時移之勢退藝才藝之地適之和
哥之中興之業吾道之再昌者乎人麿既沒和哥
不在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四月十日臣
貫之等謹序

此集家之所稽雖然之至旦任師說又如之見為
備後證之詮本不顧老眼之不堪手自書之
近代繼業之好士書生之失錯稱有識之秘
事可謂道之廢姓不可用之仕如此用捨只
可隨其力所好不可存自他之差別之同者可

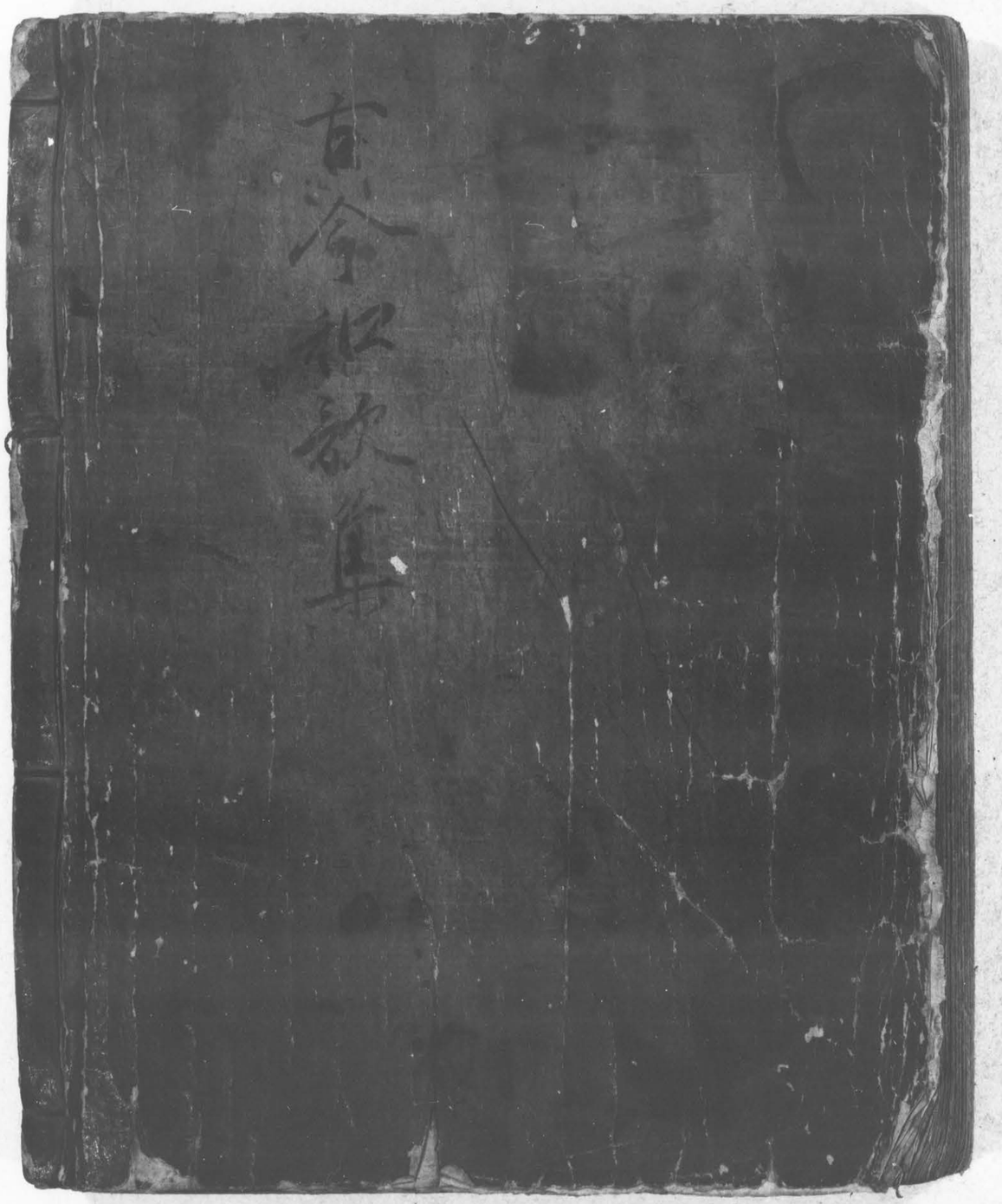
隨之

貞應貳年七月廿二日　　前參議藤在判

同廿八日令讀合訖書入前本

傳于嫡孫可為將來之證本

九州大學圖書印


古今和歌集